

南条故七郎五郎殿の四十九日御菩提のために送り給ふ物の日記の事、鷲目両ゆひ・白米一駄・芋一駄・すりだうふ・こんにやく・柿一籠・ゆ五十等云云。御菩提の御ために法華經一部・自我偈数度・題目百千返唱へ奉り候ひ畢んぬ。

抑 法華經と申す御經は一代 聖 教 には似るべくもなき御經にて、而も唯仏与仏と説かれて、仏と仏とのみこそしるしめされて、等覺已下乃至凡夫は叶はぬ事に候へ。

されば竜樹菩薩の大論には、仏已下はたゞ信じて仏になるべしと見えて候。法華經の第四法師品に云はく「薬王今汝に告ぐ、我が所説の諸經あり、而も此の經の中に於て、法華最も第一なり」等云云。第五の巻に云はく「文殊師利、此の法華經は、諸仏如来の秘密の蔵なり。諸經の中に於て最も其の上に在り」等云云。第七の巻に云はく「此の法華經も亦復是くの如し。諸經の中に於て、最も為れ其の上なり」と。又云はく「最も為れ照 明 なり。最も為れ其の尊なり」等云云。此等の經文、私の義にあらず、仏の誠言にて候へば定めてよもあやまりは候はじ。民が家に生まれたる者、我は 侍 に齊しななど申せば必ずとが来たる。まして我国王に齊し、まして勝れたりななど申せば我が身のとがとなるのみならず、父母と申し、妻子と云ひ、必ず損ずる事、大火の宅を焼き、大木の倒るゝ時小木等の損ずるが如し。

仏教も又かくの如く、華嚴・阿含・方等・般若・大日經・阿弥陀經等に依る人々の、我が信じたるまゝに勝劣も弁へずして、我が阿弥陀經等は法華經と齊等なり、将又勝れたりななど申せば、其の一類の人々は我が經をほめられ、うれしと思へども、還つてとがとなりて師も弟子も檀那も悪道に墮つること箭を射るが如し。但し法華經の一切經に勝れりと申して候はくるしからず、還つて大功德となり候。經文の如くなるが故なり。

此の法華經の始めに無量義經と申す經おはします。譬へば大王の行幸の御時、將軍前陳して狼藉をしづむるが如し。其の無量義經に云はく「四十余年には未だ眞実を顕はさず」等云云。此は將軍が大王に敵する者を大弓を以て射はらひ、又太刀を以て切りすつるが如し。華嚴經を読む華嚴宗・阿含經の律僧等・觀 經 の念仏者等・大日經の眞言師等の者共が、法華經にしたがはぬをせめなびかず利劍の勅宣なり。譬へば貞任を義家が責め、清盛を頼朝の打ち失せしが如し。無量義經の四十余年の文は不動 明 王の劍索、愛染 明 王の弓箭なり。故南条五郎殿の死出の山三途の河を越し給はん時、煩惱の山賊・罪業の海賊を静めて、事故なく靈山浄土へ參らせ給ふべき御供の兵者は、無量義經の四十余年未顕眞実の文ぞかし。法華經第一の巻方便品に云はく「世尊は法久しくして後、要 ず 当に眞実を説きたまふべし」と。又云はく「正直に方便を捨てゝ、但無上道を説く」云

云。第五の巻に云はく「唯、^{けいちゆう}髻^{みょうじゆ}中の明珠」と。又云はく「独り王の頂上に、此の一つの珠有り」と。又云はく「彼の強力^{すなわ}の王の、久しく護れる明珠を、今乃ち之を与ふるが如し」等云云。文の心は日本国に一切^{いっさいきよう}経わたれり、七千三百九十九巻なり。彼々の経々は皆法華経の眷属^{けんぞく}なり。例せば日本国の男女の数四十九億九万四千八百二十八人候へども、皆一人の国王の家人たるが如し。一切経の心は愚癡^{ぐち}の女人なんどの唯一時に心うべきやうは、たとへば大塔をくみ候には先づ材木より外に足代^{あししろ}と申して多くの小木を集め、一丈二丈計り^結ゆひあげ候なり。かく^結ゆひあげて、材木を以て大塔をくみあげ候ひつれば、返って足代を切り捨て大塔は候なり。足代と申すは一切経なり、大塔と申すは法華経なり。仏一切経を説き給ひし事は法華経を説かせ給はんための足代なり。正^{しょう}直捨方便^{じきしゃほうべん}と申して、法華経を信ずる人は阿弥陀経等の南無阿弥陀仏、大日経等の真言宗、阿含経等の律宗の二百五十戒等を切りすて^{なげう}抛ちてのち法華経をば持ち候なり。大塔をくまんがためには足代大切なれども、大塔をくみあげぬれば足代を切り落とすなり。正直捨方便と申す文の心是なり。足代より塔は出来して候へども、塔を捨て、足代ををがむ人なし。今の世の道心者等、一向に南無阿弥陀仏と唱へて一生をすごし、南無妙法蓮華経と一返も唱へぬ人々は^拜大塔をすて、足代ををがむ人々なり。世間にかしこくはかなき人と申すは是なり。

故七郎五郎殿は当世の日本国の人々にはにさせ給はず。^似をさなき心なれども賢き父の跡をおひ、御年いまだは^{二十}たちにも及ばぬ人が、南無妙法蓮華経と唱へさせ給ひて仏にならせ給ひぬ。無一不成仏とは是なり。乞ひ願はくは悲母我が子を恋しく^{おぼ}思し^め食し給ひなば、南無妙法蓮華経と唱へさせ給ひて、故南条殿・故五郎殿と一所に生まれんと願はせ給へ。一つ種は一つ種、別の種は別の種。同じ妙法蓮華経の種を心にはらませ給ひなば、同じ妙法蓮華経の国へ生まれさせ給ふべし。三人^{おもて}面をならべさせ給はん時、御悦びいか^嬉うれしくおぼしめすべきや。

抑^{そもそも}此の法華経を開いて^{つかまつ}拜見仕り候へば「如来則ち、衣を以て之を覆ひたもふ^べ為し。又、他方の現在の諸仏に護念せらるゝことを為ん」等云云。经文の心は東西南北八方、並びに三千大千世界の外、四百万億那由他の国土に十方の諸仏ぞくぞくと充滿せさせ給ふ。天には星の如く、地には^{とうま}稻麻のやうに^{なみい}並居させ給ひ、法華経の行者を守護せさせ給ふ事、譬へば大王の太子を諸の臣下の守護するが如し。但四天王一類のまぼり給はん事のかたじけなく候に、一切の四天王・一切の星宿・一切の日月・^{たいしやく}帝釈^{ぼんてん}・梵天等の守護せさせ給ふに足るべき事なり。其の上一切の二乗・一切の菩薩・兜卒内院の弥勒菩薩・^{からだ}迦羅陀山の地蔵^{ふだらく}・^{しょうりよう}補陀落山の觀世音^{もんじゆしり}・清涼山の文殊師利菩薩等、各々眷属を具足して法華経の行者を守護せさせ給ふに足るべき事に候に、又かたじけなくも^手釈迦^自・多宝・十方の諸仏のてづからみづから来たり給ひて、昼夜十二時に守らせ給はん事のかたじけな

さ申す計りなし。

かゝるめでたき御経を故五郎殿は御信用ありて仏にならせ給ひて、今日は四十九日にならせ給へば、一切の諸仏りょうぜん靈山浄土に集まらせ給ひて、或は手にすへ、或は頂をなで、或はいただき、或は悦び、月の始めて出でたるが如く、花の始めてさけるが如く、いかに愛しまいらせ給ふらん。

抑そもそもいかなれば三世十方の諸仏はあながちに此の法華経をば守らせ給ふと勸へて候へば、道理にて候ひけるぞ。法華経と申すは三世十方の諸仏の父母なり、めのとなり、主にてましましけるぞや。か蛙えると申す虫は母の音こえを食とす。母の声を聞かざれば生長する事なし。から迦羅求羅ぐらと申す虫は風を食とす。風吹かざれば生長せず。魚は水をたのみ、鳥は木を栖すみかとす。仏も亦かくの如く、法華経を命とし、食とし、すみかとし給ふなり。魚は水にすむ、仏は此の経にすみ給ふ。鳥は木にすむ、仏は此の経にすみ給ふ。月は水にやどる、仏は此の経にやどり給ふ。此の経なき国には仏まします事なしと御心得あるべく候。

古昔輪陀王むかしりんたおうと申せし王なんえんぶだいをはしき。南閻浮提の主なり。此の王はなにをか供御くごとし給ひしと尋ぬれば、白馬のいなゝくを聞いて食とし給ふ。此の王は白馬のいなゝけば年も若くなり、色も盛んに、魂もいさぎよく、力もつよく、又まつりごと政事も明らかなり。故の其の国には白馬を多くあつめ飼ひしなり。譬へば魏王と申せし王の鶴とくそうを多くあつめ、徳宗皇帝のほたる螢を愛せしが如し。白馬のいなゝく事は又白鳥の鳴きし故なり。されば又白鳥を多く集めしなり。或時いかん如何がしけん、白鳥皆失うせて白馬いなゝかざりしかば、大王供御くごたえて、盛んなる花の露にしほれしが如く、満月の雲覆におほはれたるが如し。此の王既にかくれさせ給はんとせしかば、后・太子・大臣・一国皆母に別れたる子の如く、皆色をうしなひて涙を袖におびたり。如何いかんがせん如何がせん、其の国に外道多し、当時の禅宗・念佛者・真言師・律僧等の如し。又仏の弟子も有り、当時の法華宗の人々の如し。中なかあ悪しき事水火なり。胡こと越えつとに似たり。大王勅宣を下して云はく、一切の外道此の馬をいなゝかせば仏教を失ひて一向に外道を信ぜん事諸天の帝たいしやく釈を敬ふが如くならん。仏弟子此の馬をいなゝかせば一切の外道の頸くびを切り、其の所をうばひ取りて仏弟子につくべしと云云。外道も色をうしなひ、仏弟子も歎きあへり。而れどもさてはつべき事果ならねば、外道は先に七日を行なひき。白鳥も来たらず、白馬もいなゝかず。後七日を仏弟子に渡して祈らせしに、馬めみょう鳴と申す小僧一人あり。諸仏の御本尊とし給ふ法華経を以て七日祈りしかば白鳥壇上に飛び来たる。此の鳥一声鳴きしかば一馬一声いなゝく。大王は馬の声を聞いて病の床よりをき給ふ。后より始めて諸人馬鳴に向かひて礼拝をなす。白鳥一・二・三乃至十・百・千出来して国中に充滿せり。白馬しきりにいなゝき、一馬・二馬乃至百・千の白馬いなゝきしかば、大王此の音きを聞めこし食かし面かかたち貌は三十計

り、心は日の如く明らかに、^{まつりごと}政正直なりしかば、天より甘露ふり下り、勅風万民をなびかして無量百歳代^よを治め給ひき。

仏も又かくの如く、^{た ほうぶつ}多宝仏と申す仏は此の経にあひ給はざれば御入滅、此の経をよむ代には出現し給ふ。釈迦仏・十方の諸仏も亦復かくの如し。かゝる不思議の徳まします経なれば此の経を持つ人をば、いかでか^{てんしょうだいじん}天照太神・^{せんげん}八幡大菩薩・富士千眼大菩薩^{せんげん}させて給ふべきとたのもしき事なり。又此の経にあだをなす国をばいかに正直に祈り候へども、必ず其の国に七難起こりて他国に破られて亡国となり候事、大海の中の大船の大風^{かんばつ}に値ふが如く、大旱魃の草木を枯らす^{かんばつ}が如しとをぼしめせ。当時日本国のいかなるいのり候とも、日蓮が^{もんごこく}一門法華経の行者を^攻あなづらせ給へば、さまざまの御いのり叶はずして、大蒙古国に^{もうごこく}せめられてすでに^亡ほろびんとするが如し。今も御覽ぜよ。たゞかくては候まじきぞ。是皆法華経をあだませ給ふ故と御信用あるべし。

^{そもそも}抑 故五郎殿かくれ給ひて既に四十九日なり。無常はつねの習ひなれども此の事うち^間きく人すらなをしのびがたし。いわうや母となり妻となる人をや。心のほどをしはかられて候。人の子には^幼をさなきもあり、^醜をとなきもあり、^{不 具}みにくきもあり、かたわなるもあり、^{男 子}をのこゝたる上、かたわにもなし、^{弓 矢 障 害}ゆみやにもさゝひなし、^情心もなさけあり。故上野殿には盛んなりし時^後をくれてなげき浅からざりしに、此の子を^{孕 産}はらみていまださんなかりしかば、火にも入り水にも入らんと思ひしに、此の子すでに平安なりしかば、誰にあつらへて身をも^投なくべきと思ひて、此に心をなくさめて此の十四五年はすぎぬ。いかにいかにとすべき。二人の^{男 子}をのこゝに^担こそになわれめと、たのもしく思ひ候ひつるに、今年九月五日、月を雲にかくされ、花を風にふかせて、ゆめかゆめならざるか、あわれひさしきゆめかなとなげきをり候へば、うつゝににて、すでに四十九日は^馳せすぎぬ。まことならばいかに^{久 夢 嘆 屋 現 似}せんいかんがせんいかんがせん。さける花は^{枯 老}ちらずして、つぼめる花の^{若 子 去 情 無}かれたる。をいたる母はとゞまりて、わかきこはさりぬ。なさけなかりける、無常かな無常かな。かゝるなさけなき国をばいと^{厭 捨}すてさせ給ひて、故五郎殿の御信用ありし法華経につかせ給ひて、^{じょうじゅう ぶ え}常住不壊のりやう山浄土へまいらせさせ給へ。ちゝは^父りやうぜんにまします。母は娑婆にとゞまり。二人の中間にをはします故五郎殿の心こそ、^哀をもられてあわれにをばへ候へ。事多しと申せどもとゞめ候ひらんぬ。恐々謹言。

十月二十四日

日 蓮 花 押

上野殿母尼御前御返事